
ゲル状がいいのお ♪

しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲル状がいいのお♪

【Nコード】

N8006P

【作者名】

しのぶ

【あらすじ】

放課後の部室でウトウトと居眠りをするムギ、彼女の寝言を聞いた唯達はムギがどんな夢を見ているのか話し合う。そんな他愛もない日常の一コマですへへ

掃除も早く終わったし、今日は私が一番乗りかな？

音楽室の扉を開けると椅子の上には鞆が1つ置いてありました。

梓 （これはムギ先輩の鞆だね？・・・でも姿が見えないけど、どこに居るんだろ？）

辺りを見渡すと準備室の奥にあるソファーに人影が・・・覗き込むとそこには気持ちよさそうに寝ているムギ先輩が居ました。

梓 （ムギ先輩の寝顔って初めてみたけど可愛い～！）

しゃがみこんでムギ先輩の顔を見ている所に他の先輩方が入ってきました。

律 「おい～っす！」

唯 「あ、あずにゃん！今日は早いんだね」

滯 「ん？梓、何してるんだ？」

梓 「シ～～～～！今ムギ先輩が寝てるんです、静かにしないと

起きちゃいますよ」

私は先輩方に声を出さないようにして静かに近付くように言いました。

律 「なんだムギ、真っ先に教室を出たからもうお茶の用意は出来てると思ってたのに・・・寝てるのかよ」

唯 「ムギちゃん可愛いっ、プニプニしたくなっちゃうね」

梓 「唯先輩ダメですよ！ せっかく気持ちよく寝てるんですから！ 今日私は私がお茶の用意をしますから起こさないようにして下さいよ」

紬 （ん・・・）

梓 「ほら！ 先輩方が騒がしいから！」

紬 （うふふ・・・ゲル状がいいの・・・）

梓 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

律 「ブッ！ 何だ今の寝言！」

滯 「クク・・・クククク・・・」

唯 「ムギちゃんどんな夢みてるんだろ？」

梓 「もう！ これ以上騒ぐと本当に起きちゃいますから向こうに行きましょう！」

私達は準備室の扉を閉めて、隣の部屋へと移動しました。

律 「それにしてもムギの奴、笑いながら『ゲル状がいいの』って、どんな夢見たらそんなセリフが出るんだよ」

唯 「ムギちゃんいつもみんなとお茶を飲んでる時みたいな笑顔だったから、お茶会の夢じゃないのかなあ？」

澪 「お茶会でゲルって・・・」

唯 「だからあ・・・」

【あら、唯ちゃん今日は早いのね】

【うん、ムギちゃんの持ってくるお菓子が待ち遠しくて授業を途中で抜け出して来ちゃった】

【あらあら】

【ねえねえ、今日はどんなお菓子なの？】

【今日は生プリンと生ババロアと特製苺ショートケーキよ】

【わーい！ でもプリンの『生』って何？】

【普通のプリンよりも口溶けが良くて美味しいのよ】

【へえーそうなんだ、じゃあこのショートケーキって何が特製なの？
外見はいつもと同じように見えるけど？】

【これはねえ、生地もクリームも全く新しい食感でドロリとしてのよ、だから今日は飲み物も特別でトロミがある葛湯にしてみたの
お♪】

【何だか今日はグチヨグチヨの物ばかりなんだね・・・】

【何言ってるのよ唯ちゃんこれが美味しいんだから】

【そうかなあ？】

【うふふ・・・ゲル状がいいのよ♪】

律 「食べたくなえ〜！」

梓 「嫌なお茶会ですね・・・」

唯 「じゃあ律ちゃんはどうな夢だと思うのよお」

律 「そうだな、ムギって女の子が好きだろ？ だから・・・」

【滯ちゃん・・・みんな遅いわね】

【ああ、律と唯はテストの成績の事で職員室に呼ばれてたからな、もう少し掛かるんじゃないか？】

【そう・・・梓ちゃんは今日風邪でお休みだし・・・】

【そうなんだ】

【ねえ滯ちゃん】

【どうしたムギ？】

【部室で2人きりになるのなんて初めてね・・・】

【そう言えばそうだな・・・改めて言われると何だか照れるな】

【滯ちゃん・・・みんなには内緒のお話があるんだけど・・・】

【ん？ 悩み事でもあるのか？ 私でよかったら相談にのるぞ】

【実は・・・私、前から滯ちゃんの事が好きで・・・】

【え！？ それって友達として好きって事だよな？】

【ううん・・・愛してるの・・・】

【ムギ・・・】

【滯ちゃんが律ちゃんと仲良くしてるのを見るだけで胸が痛くなつて・・・もう我慢できないのよ】

【ちょ・・・ムギ落ち着け！】

【ダメよ、今日は琴吹家特製のこのローションを使って・・・】

【何だよそれ！ そんなドロドロなの気持ち悪い！】

【うふふ・・・このゲル状がいいのよ♪ すぐ気持ち良くなるわ】

滯 「な・ん・だ・そ・れ・は！」

律 「イテイテイテッ！」

さすがは漣先輩！ スタツカートの効いた切れのあるチョップ！

律 「んゝ・・・ 結構いい線いってたと思うんだけどな」

漣 「どこがだ！」

梓 「って言うか律先輩は変な雑誌とか読みすぎですよ！」

律 「じゃあ梓はどう思うんだよ」

梓 「そうですね、ムギ先輩の家はお金持ちだから私達とは違う感性があると思うんです・・・」

【今日も何か良い物が出てないかしらね？】

（テレフォンショッピング！ 今日ご紹介の商品は、ほんの少し塗るだけでお肌が赤ちゃんのようにきめ細かく若返る魔法の化粧水です！）

【こ・・・これは買わないと・・・斉藤！】

【はい、お嬢様】

【この化粧水が欲しいの】

【かしこまりました、一時間だけお待ち下さい】

【今すぐ欲しいの！ 30分しか待てないわ】

【分かりました・・・メイド部隊！ 直ちにヘリを用意して各地へ飛びなさい！】

30分後

【お嬢様、関東地方にある化粧水を全て集めて大浴場の湯船に満たしておきました、明日以降、中部地方、近畿地方と順次集めさせ琴吹家に運ぶよう手筈は整っております】

【ありがとう斉藤】

【もったいないお言葉です】

ゆっくりと湯船に入っていく紬。

【お嬢様、如何でしょうか？】

【この全身を包み込む感触がたまらないわ】

【満足して頂けて光栄です】

【うふふふ♪ このゲル状がいいのお♪】

律 「そんな事あるか！ って否定しきれないのが怖いな・・・」

唯 「私もゲル風呂入りた〜い」

律 「ゲル風呂って何か響きが汚いぞ」

漚 「んゝ・・・」

梓 「漚先輩、何を唸ってるんですか？」

漚 「ムギの幸せそうな顔を見たら食べ物とか化粧水とか、そんなのじゃないような気がするんだよな」

梓 「じゃあ何だと思っんです？」

漚 「そうだな・・・」

【どうして？ どうしてなの！】

【ごめん・・・僕は・・・】

空港で見詰め合う紬と青年。

【どうして私を連れて行ってくれないの！】

【紬は琴吹家の一人娘・・・それに引き換え僕は才能の無いただの画家・・・】

【それが何だって言うのよ・・・私・・・】

【僕には紬を幸せにする力なんて無いんだよ】

【ばか！ ゲルジョーのばか！ あなたと一緒にになる事以外に私が幸せになれる事があると思ってるの！】

【紬・・・】

【どうして言ってくれないの？！ 私、ゲルジョーが着いて来て欲しいって言えば琴吹家を捨ててもいいのに・・・何もかも捨ててあなたの国に行ってもいいのに・・・】

【僕だって紬と離れたくなかない・・・】

【だったらもう置いていくなんて言わないで、お願いだから私も一緒に・・・】

【辛い思いをさせるかもしれないよ・・・】

【あなたと一緒になら・・・あなたが傍に居てくれたら、どんな場所でも私は幸せなもの】

2人は強く抱きしめ合い口づけを交わした。

この人とは絶対に離れない、そう心に決めた紬の顔にはもう涙はなかった。

【本当にいいんだね・・・今ならまだお父さんが決めた婚約者・・・

】

紬は人差し指を彼の唇に当て言葉をさえぎった。
そして満面の笑顔で彼を見つめ答えた。

【うふふ・・・私はゲルジョーがいいの♪ 他の誰でもないゲルジョーの傍に居たいの♪】

律 「どこの国の人間なんだよそいつは!!」

梓 (ククク・・・ゲルジョーって・・・ククク・・・)

唯 「どうしたんだい梓、具合でも悪いのかい？ このゲルジョーに話してごらん！」

梓 「あははははは、唯先輩止めてください・・・笑いすぎてお腹痛いです」

律 「それにしても漣の頭の中は相変わらず甘々だな」

漣 「なんだよそれ・・・」

みんなの話が盛り上がって声が大きくなってきたのか、ムギ先輩が起きてきちゃいました。

紬 「あら・・・みんな来てたの？ すぐお茶の用意するから待っててね♪」

律 「ムギ！ お茶はあとでいいからちよっと聞かせてくれないか？」

紬 「え？ 何を？」

律 「ゲル状って何だ？」

紬 「ゲル状？ 律ちゃん何の事言ってるの？」

律 「何って・・・ムギ、何かこうゲルゲルとした夢見たんじゃないのか？」

漣 「ゲルゲルって・・・」

紬 「んー・・・良く分からないわ、ごめんなさいね」

律 「忘れたって言うのか？ このモヤモヤした気持ちはどうしてくれるんだよ！ ムギ！ もう一度寝ろ！ 寝て同じ夢を見るんだ！」

紬 「律ちゃん、そんな無茶言わないでよ」

梓 「そうですね、ムギ先輩が悪い訳じゃないんですから」

唯 「もう画家のゲルジョーさんでいいじゃない」

律 「それだけは却下だ！」

翌日の放課後は先輩方と打ち合わせをしてワザと遅れて行きました。

私達は部室の外からムギ先輩の行動を見張って眠るのを待っていました。

律 「今日はムギが寝言を言ったらすぐに起こして夢の内容を聞くぞ」

唯 「おお〜！」

暫くするとムギ先輩はソファーに腰掛け、ウトウトし始めました。

律 「よし、静かに静かに・・・」

唯 「ムギちゃんの寝顔ってやっぱり可愛いよねえ〜」

漣 「みんなで取り囲んで同級生の寝顔を見つめてるって、変な状況だな・・・」

梓 「あ！ ムギ先輩が何か言いそうですよ！」

紬 （うふふふ・・・タクアン・・・）

漣 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

唯 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

梓 「新しい謎が1つ増えちゃいましたね・・・」

律 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8006p/>

ゲル状がいいのお♪

2011年1月3日21時52分発行